# 1|ミルグラム監獄内

尋問室薄暗い尋問室の中。

不安そうに椅子に座っているハルカ。

扉の外からコツコツと足音。

ハルカ 「......ぁ」

ガシャンと乱暴に扉が開く。

ハルカ 「......っ」

びくっと怯えるハルカ。

扉を開けたエスは気にすることもなく、座っているハルカの前に立つ。

エス 「さて、尋問を始めよう。囚人番号1番、ハルカ」

ハルカ 「は、はい......。ご、ごめんなさい」

エス 「......？何を謝ることがある？」

ハルカ 「あ、あ、いや......ごめんなさい」

ハルカの態度を不思議がりつつも話を続けるエス。

エス 「ふむ。ミルグラムはお前たち囚人の罪を明らかにし、適切な判断をくだすために存在している。そのためにいくつか話をしよう」

ハルカ 「はぁ」

エス 「なに、尋問といっても現段階では手荒な真似をするつもりはないから安心しろ。ちなみに、虚偽も黙秘も認めている」

ハルカ 「きょぎ、もくひ......」

エス 「言いたくないことは言わなくても構わないし、嘘をつきたければついても構わない」

エスの言葉に意外そうに口を開くハルカ。

ハルカ 「そうなん、ですか......」

エス 「あぁ、ミルグラムはお前の記憶から直接歌を取り出すからだ。僕はそれを見てお前の罪を判断する」

ハルカ 「……」

エス 「つまりお前がどんな主張をしようと大きな問題はなむしろ黙秘をした “嘘をついた” ということ自体がお前が自分の罪に対してどういう意識を持っているかを示すことになる」

ハルカ 「はぁ……」

エス 「そもそも、罪に対して反省しているかどうか、それを判決の基準にするかすら僕次第なのだがな。わかるな？」

少し困ったように考えるハルカ。

ハルカ 「えっと……わかりません」

エス 「は？」

ハルカ 「え？」

エス 「ん？」

ハルカ 「あ、え、あの何言っているかわかりませんでした。むずかしくて」

エス 「……うん？」

ハルカ 「あの、ごめんなさい僕あたまがあまり……」

軽く頭痛を覚えながら、言葉を続けるエス。

エス 「……ハルカ、お前歳はいくつだ」

ハルカ 「えっと777だったと思います」

エス 「……思います？」

ハルカ 「あ、いや、自分の年齢に興味なくて……ごめんなさい」

エス 「……調子狂うな」

おもわずこぼすエス。

エス 「……続けようか。ミルグラムでの生活はどうだ？」

ハルカ 「あ、あの最初はわけわからないしちょっと怖かったんですけどみんな良い人なんで、大丈夫です……」

エス 「みんな、とは。他の囚人連中か？」

ハルカ 「あ、はいあの、ユノさんとかマヒルさんとか優しく、てくれます……」

少し考えたのち、改めてハルカをじっと見つめる

エス 「……少し興味があるな。ハルカの目に他の囚人はどう映っている」

ハルカ 「あ、え、いや。ぼ、僕なんかがみんなのことを喋るの、わるいです」

エス 「安心しろ。この部屋でのことを他の囚人に漏らすことはない」

ハルカ 「えっと……は、はい……何を話せばいいんでしょうか

エス 「そうだな。誰とよく話すんだ？」

ハルカ 「あ、よく話しかけてくれるのはユノさんと、マヒルさんと、えっとミコトさん……フータくんも、少し怖いけど、かまってくれます。ムウさんとも、たまに話します……」

エス 「ふむ、カズイやシドウは？」

ハルカ 「あ、あの大人なんで、少し怖いんですけど二人とも優しい人だと思います……」

エス 「コトコは？」

ハルカ 「あ、ちょ、ちょっと怖いです」

エス 「まぁ予想通りだ。あとは名前が出てないのはアマネか」

アマネの名前が出て、少しトーンが落ちるハルカ。

それとは裏腹に落ち着かず細かい手の動きが増える。

ハルカ 「ア、アマネちゃん……」

エス 「どうした」

ハルカ 「に、苦手なんです……あれくらいの、子供……あ、あ、アマネちゃんは良い子なんですけどい、いや、い、いやなことを、思い出すんで……」

顔を下げ、頭を抱えるハルカ。

エス 「大丈夫か？随分顔色が悪いな」

ハルカ 「そもそも、あまり僕は人と関わっちゃいけないんです……し、囚人のみんなとも……勘違いしちゃだめなんだ」

エス 「なぜだ。好きにすればいいじゃないか。僕は他者との関係の中でこそその人間の本質が見えると考えている」

バッと顔を上げ、エスに対して前のめりになるハルカ

ハルカ 「かっ……看守さんにも言えることなんだ」

エス 「僕にも？」

ハルカ 「……あまり僕に近づかない方がいい。生まれつき人を不幸にすることは得意なんです……
僕を知ろうとすればするほどきっと看守さんも不幸になる……」

エス 「ハルカ……」

ハルカ 「だって、だって……あぁ、ごめんなさい、一人でずっとしゃべって……」

エス 「……続けろ」

ハルカ 「い、いつだってそうなんだ。僕が、僕は、ただ普通にしてるだけなのにぜんぶ、だめにしてしまう……」

ハルカ 「看守さんだって、みんなだって僕のことを知ったら……僕のしたことをすべて知ったら」

ハルカの目に浮かぶ涙。

ハルカ 「僕を、見捨てるに決まってる……」

頭を抱え、震えるハルカ。

ハルカ 「ぼくは身勝手な “ヒトゴロシ” だから……」

しばらくハルカを見つめたあと一息をつき話始めるエス。

エス 「……ハルカ」

ハルカ 「はい……」

エス 「顔をあげろ」

ハルカ 「はい……」

エス 「……ふんっ！」

ハルカ 「ぎゃん！」

ハルカの顔面を思いっきりビンタするエス。

思い切り後ろに椅子ごと倒れるハルカ。

床に尻もちをつき、頬を抑えるハルカ。

ハルカ 「い、いたい……な、何をするんですか……」

ハルカを見下ろし、冷たく言い放つエス。

エス 「僕は看守だ。今のは囚人に対しての教育的指導だ。赦される」

ハルカ 「うっ……」

ハルカの襟首をつかむエス。

顔をぐっと近づけ威圧的に話しかける。

エス 「いいか、よく聞け囚人番号1番。何度でも言おう、僕は看守だ。お前の本性を知るのが僕の仕事だ。お前が何者だろうと、お前がどんな非道を働いていようとすべて見届け判断するのが僕の仕事だ」

静かに怒りを押し殺しながら言葉を続ける。

エス 「それを言うに事欠いて、見捨てるだと……？あまり僕をナメるなよ……」

ハルカ 「あ……あぁ」

エス 「お前の罪を知り、お前の罪を赦すか赦さないか判断し終えるまで、お前は僕の管理物だ。逃してもらえるなどと思うな」

ハルカ 「か、看守さん……」

エスの威圧感に呆然としていたハルカ。自然と口角があがっていく。

ハルカ 「ふ、うふ……」

エス 「ちょっと待てハルカ。何をニヤニヤしている」

ハルカ 「えっ……あ、あ、ごめんなさい。きもちわるいですよね……へ……へ……」

エス 「きもちわるい」

掴んでいた襟首を離すエス。

床に正座するハルカ。

ハルカ 「あっ、あっ……ちがくてへ、へんなはなしなんですけどちょっと、うれしくて……」

エス 「……嬉しい？」

ハルカ 「はい……」

エス 「おかしな話だな。僕が言うのも難だが監禁され、拘束され、こうして尋問されている。この状況に対して怒りや恐れを覚えるのが自然だろう」

顎に手を当て考える様子のエス。

エス 「......そういえばお前は最初からずっとそうだ。ふさぎ込んではいるがミルグラム自体への混乱を感じない。その点はフータやムウの反応の方が腑に落ちるというものだ」

ハルカ 「そ、そうですね......フータくんはすごく怒ってますね......こわいじゃ、じゃなくていや、あの僕はこのミル、グラムでしたっけ。何のためにあるのかとか、よくわかってないんですけど看守さんが自分に興味を持ってくれて、色々聞いてくれるのは、なんだか嬉しかったりします」

床に正座するハルカ。

ハルカ 「あっ、あっ......ちがくてヘ、へんなはなしなんですけどちょっと、うれしくて......」

エス 「......嬉しい?」

ハルカ 「はい......」

エス 「おかしな話だな。僕が言うのも難だが監禁され、拘束さ れ、こうして尋問されている。この状況に対して怒りや恐れを覚えるのが自然だろう」

顎に手を当て考える様子のエス。

エス 「......そういえばお前は最初からずっとそうだ。ふさぎ込 んではいるがミルグラム自体への混乱を感じない。その 点はフータやムウの反応の方が腑に落ちるというものだ」

ハルカ 「そ、そうですね......フータくんはすごく怒ってますね ......こわいじゃ、じゃなくていや、あの僕はこのミル、 グラムでしたっけ。何のためにあるのかとか、よくわかっ てないんですけど看守さんが自分に興味を持ってくれて、 色々聞いてくれるのは、なんだか嬉しかったりします......」

エス「......」

ハルカ 「そ、それがおしごとでも僕のやったわるいことをあきらかにするためだったと、しても......です」

エス 「......ふむ」

ハルカ 「......」

エス 「変なやつだな」

ハルカ 「あう......」

正座のままびくびくしているハルカ、遠い目をするエス。

エス 「一人目から特殊すぎる。お前は七人目くらいでくるべきだ。この仕事の大変さを今はっきり理解した」

ハルカ 「ご、ごめんなさい......」

エス 「ふむ。まぁ良い。反抗的な囚人よりはいくらかマシだな......」

ハルカ 「......ほっ」

安堵のため息をこぼすハルカ。

エス 「ただし! あまり勘違いをするなよ、ハルカ。僕はお前 と仲良くしたくて話を聞いているわけではない僕の目的 はあくまでお前の犯した罪を知ることだ。お前が何をし たのか、なぜ“ヒトゴロシ〟となったかを知るためだ」

ハルカ 「は、はい......」

エス 「まだニヤニヤしている」

ハルカ 「ごっ、ごめんなしゃい」

頬を手で抑えて笑みをごまかすハルカ。

エス 「緊張感のない男だ。僕がお前を赦さないと判断するだけでお前の身にどんなことが起きるか......」

ハルカ 「何がおきるんですか?」

エス「......」

突如出来た無言の時間にあわてるハルカ。

ハルカ 「......えっと」

エス 「さぁな。お前は考える必要はない......きっと僕にもな」

ハルカ 「......」

エス 「そうだ、あとひとつ言いたいことがある。お前は自分が身勝手なヒトゴロシだから周りと関わってはいけないといったな」

ハルカ 「はい......」

エス 「囚人どもは皆”ヒトゴロシ”だ。何を遠慮することがあるあいつらにくらい好きに振る舞えばいい」

ハルカ 「......えっと」

わずかに口角のあがるエス、

エス 「お前にもわかりやすく言おうか。お前ら全員ダメ人間だ。だから気にするな」

ハルカ 「......は、はは ......それも、そうですね」

エス 「ふっ」

突如部屋にある時計から鐘の音がなる部屋の構造が変化していく。

ハルカ 「え……」

エス 「おしゃべりの時間は終わりのようだ。恐れることはない。ただお前の記憶をのぞかせてもらうだけだ」

怯えるハルカの肩に手を載せるエス。

エス 「囚人番号1番、ハルカさぁ。お前の罪を歌え」